

聖書：使徒 28：1～15

説教題：ローマに到着

日時：2014年10月26日

使徒の働きの最終章。ローマへと向かうパウロの旅が綴られて来ましたが、前の章ではパウロの乗った船が地中海で嵐に見舞われ、難破したことを見ました。パウロを含めて乗客全員の命が危ぶまれました。しかしその嵐を乗り切って「みな、無事に陸に上がった」と最後の節に記されました。こうして「船は失われるが、命を失う者はひとりもない。」という主の約束は確かに成就しました。

さて、打ち上げられた島はマルタ島であったことを上陸後にパウロたちは知りません。太陽も星も見えない日が続き、今どこを漂流しているのか皆目見当もつかない状態にありましたが、投げ出されたところは何と目的地イタリアのすぐ近くでした！島の人々は親切に助けてくれました。これから冬に向かうという時期の冷たい朝、全身ずぶぬれで、やっとのこと陸に這い上がって来たパウロたち。しかもこの日はおりから雨が降り出して寒かった、とあります。そんな彼らを見て、マルタ島の住民は火をたいて、もてなしてくれたのです。その時のエピソードがまず記されています。

そのエピソードとは、パウロがひとかかえの柴を束ねて火にくべると、熱気のために一匹のマムシが這い出して来てパウロの手に取り付いたということです。島の人々はパウロの手から、その生き物が下がっているのを見て、こう言い合いました。「この人はきっと人殺しだ。海からはのがれたが、正義の女神はこの人を生かしてはおかないのだ。」ところがパウロはその生き物を振り払って火の中に落とします。人々は彼の手が今にもはれ上がって来るか、または倒れて急死するだろうと思って見ていましたが、いくら待っても変わった様子が見えません。その結果、彼らは考えを変えて「この人は神様だ！」と言い出したのです。

果たしてこの記事は何を言いたいのでしょうか。島の人たちはこのような迷信に囚われていたということでしょうか。最初は「この人は悪人だ。神のさばきが下ったのだ」と言いながら、次の瞬間には「この人は神様だ！」と言う。そんな心の定まらない霊的なやみの中にいた人たちであったということでしょうか。そういうことも言えるかもしれませんが、ここでのポイントはパウロが守られたということでしょう。普通マムシに手をかまれたら死に至ってもおかしくありません。あるいは重篤な状態に陥っても不思議ではありません。しかし 27 章の嵐の出来事から救われ

たことに続いて、パウロはここでも救われ、守られたのです（参照：マルコの福音書 16章 18節）。神の絶対的な守りの御手がパウロの上にあったのです！これを見て、島の人々はパウロを「神様だ！」と言い始め、パウロたちは島の首長ポプリオの家に招待されることになります。そこでこの島におけるもう一つのエピソードが記されることになります。

二つ目のエピソードは、ポプリオの父の癒しです。パウロはポプリオの父が熱病と下痢とで床に着いていたので、その人のもとに行って、祈ってから手を置いて直してやりました。これはイエス様がペテロの家で、同じく熱病で床に伏していたペテロの姑を同じようにいやされた記事を彷彿とさせます。パウロもこれまで様々な癒しのわざを行なって来ました。そのパウロの癒しのわざが改めてここでもう一つ記されている意義は何でしょうか。それは地中海の嵐をくぐり抜け、この遠い異国の地マルタ島に投げ出された時でも、なおパウロにはこのような主イエスのみわざに基づく癒しの力と権威があったということでしょう。パウロは今、囚人としてローマへ運ばれています。卑しい状態に置かれ、今や裸同然で小さな島に打ち上げられた者です。しかしそのパウロになお、このような神の国を現わす権威と力が与えられたままであった。9節に「このことがあってから、島のほかの病人たちも来て、直してもらった。」とあります。こうして地中海に浮かぶマルタ島はパウロたちを通して神の国の祝福にあずかったのです。人々はパウロたちを非常に尊敬し、島から出帆する時には必要な品々を用意してくれました。このようにパウロたち自身、神の国の恵みに生かされつつ、その恵みを分かち合う器として用いられていたのです。

11節からはいよいよローマに向かう最後の旅の様子が記されます。3カ月後に、この島で冬を過ごしていた船首にデオスクロイの飾りのあるアレキサンドリヤの船で出帆します。まずシチリヤ島のシラクサに寄港し、次いでイタリア半島の南端レギオンに着き、そこから細い海峡を通過して北進してポテオリに入港します。ここでパウロたちは7日間、兄弟たちのところに滞在します。随分長い期間、自由を与えられたものだと思いますが、もしかすると百人隊長がこの期間、用事があったのかもしれません。いずれにせよ、すでに百人隊長から大きな信頼を勝ち取っていたパウロは、このように過ごすことができました。そして14節後半について「こうして、私たちはローマに到着した」と記されています。

しかしここを注意深く読む人は疑問を持つかもしれません。なぜなら15節に、ローマのクリスチャンたちが途中までパウロたちを迎えに来たとあるからです。とい

うことはパウロはまだローマに着いていなかったのではないか。なのに 14 節には「ローマに到着した」とある。これはどういうことか、と。その説明としてしばしば 14 節の「ローマ」は、より広義の「ローマ」で、15 節や 16 節の「ローマ」は、より狭義の「ローマ」だろうと言われます。しかし何の説明もないのに、連続する節の前半ではローマ地方を、そして後半ではローマ市を意味すると取るのは、ちょっと苦しい説明ではないかと言われます。これはある人が言っていることですが、著者ルカはパウロがローマに着くことに焦点を当てて書いて来た者として、はやる心を押さえられずに、ついにそクライマックスの言葉を 14 節に書き記した。しかしその時のより詳細な出来事を書き加えるために、少し戻る形で 15 節のことを書き記した。すなわちこれはルカの心理学的な観点から説明されることである、と。そのように読むと、より一層ここに込められているルカの特別な思いを読み取ることができるように思います。

そのローマ到着する最後の部分でルカが述べていることは、パウロたちのことを聞いたローマの兄弟たちが、アピオ・ポロとトレス・タベルネまで迎えに来てくれたということです。アピオ・ポロはローマから 69 キロ南の町、トレス・タベルネはローマから 53 キロ南に下った町です。パウロたちがポテオリまで来たという知らせを聞きつけて、一週間そこに滞在している間に、出発してくれたのでしょうか。その彼らに会った時のパウロの様子が二つ記されています。まず一つ目は「神に感謝し」。パウロはついにローマのクリスチャンたちに会うことができました！彼はかねてからローマ行きを希望しており、ローマのクリスチャンたちに会って、そこからさらに西方イスパニヤに遣わされたいと願っていました。そのため、自己紹介を兼ねてあの偉大なローマ人への手紙もすでに書いていました。しかし異邦人の教会とユダヤ人の教会の一致を確かなものとするのを優先して、彼は異邦人教会からの愛の献金を携えてエルサレムに向かいました。そこでは前々から苦難を警告されていましたが、ついには殉教も覚悟せざるを得ない日々を送りました。そんな中、23 章 11 節で主ご自身から、「あなたはローマに行って証しする！」との約束を頂きました。しかしパウロは何度も裁判にかけられ、命を狙われ、暗殺計画が練られました。また囚人として投獄され、2 年間待ちぼうけを食わされたこともありました。ようやくローマに向かって出発したかと思うと地中海での難船を経験し、もう少しで助かりそうな時には兵士が囚人を皆殺しにしようと言いました。そしてマルタ島に打ち上げられた時も、手にマムシが取り付き、いつこの旅が頓挫してもおかしくない状況の連続でした。しかし今こうして夢にまで見たローマの兄弟姉妹たちと顔と顔と

を合わせて相まみえています。その時に、パウロはまず神に感謝せざるを得なかったのです。色々なことがあったが、神が約束通り、ここまで自分を導いてくださった、と。

そしてもう一つは「勇気づけられた」。これは神の導きが確かであったことを知って、神に感謝すると共に勇気づけられたということかもしれません。また迎えに来てくれたローマのクリスチャンたちとの交わりを通して勇気づけられたということでもあったでしょう。信仰の人パウロでもこのような勇気づけを必要としていました。ローマに入ろうとするパウロの心には様々な気遣いや心配もあったでしょうが、ローマの兄弟姉妹たちがこのように迎えてくれたことによって、彼の心は大いに勇気づけられたのです。このような励ましをも神は備えていてくださったのです。こうしてパウロはついにローマへと導かれて行ったのです。

次回見ますが、ローマは使徒の働きの最終目的地ではなく、一つの通過点です。しかし主の約束を受けたパウロが、どのようにここまでの道のりを導かれて来たかをルカは書き記して来ました。それはここを読む私たちも自分の人生に適用して、ここから益を受けるためでしょう。今日の箇所にも私たちを導く神はどんな神であるかが示されていました。最初のマムシのエピソードから学ぶのは、神はあらゆる危険から私たちを守っていてくださるということです。神はマムシに勝る力をもって私たちを支え、生かしていてくださる。二つ目の癒しのエピソードから学ぶことは、私たちは神の国の祝福に生かされているということです。たとえ様々な病気にかかっても、必ず回復させてくださる恵みの中に今日の私たちも生かされている。そして三つ目のエピソードから学ぶことは、神や弱い私たちへの励ましを備えていてくださるということです。特に兄弟姉妹との交わりを通して、そのことを与えてくださる。このことは私たちが虫にかまれて死ぬことは絶対にないとか、病気になって直らない状態が続くことはあり得ない、ということではありません。しかしその時でも私たちが今日の御言葉に従って信じることは、その状況で真に主権を持つておられるのは神であるということです。その方がよしとされる御旨だけが私たちに実現する。そしてその御旨はもちろん、私たちに益になるものとして神がご計画くださったものであるということです。私たちはあらゆる困難や戦いの中で、心騒がせず、この神こそを見上げ、この神にこそ信頼して従うようにとこの箇所を通して招かれているのではないのでしょうか。

パウロはローマのクリスチャンに会って、ただ喜ぶのではなく、まず神に感謝しました。これは彼がいかにそれまでの日々において神に祈り、神の主権により頼んで

来たかを示しているでしょう。その彼は、神が約束を果たしてくださったことを見て、神の真実を心から深く味わい、御名を賛美しました。私たちも自分の人生が同じこの神の守りと力の下にあることを今朝、改めて感謝して告白したいと思います。この神こそ、私たちの目の前にあるあらゆる妨げを乗り越えて、ご自身が計画したもう最善の御心に私たちを必ず到達させてくださるお方です。私たちはどんな中にあっても、この神に目を上げ、神に信頼し、神に祈り、神が定めた私たちそれぞれのローマに確実に到着させていただき歩みへ、そして神に感謝し、なお励ましを頂いて、さらに仕えさせていただき歩みへ進みたいと思います。